

【自由研究発表第4セッション 12月9日 13:00-13:35 B会場 2B206・207教室】

ベクの認識論、レッダの存在論

東インドネシア、エンデにおける意図と規約

中川 敏

(大阪大学・名誉教授)

私の調査地はフローレス島中部の山岳部のエンデである。ある時、私は、私のホストファーザーであるアップさんと隣村まででかけていった。ある家で私たちは昼食をご馳走になった。饗宴の残りなのだろう、珍しく肉の料理が出された。主人は「これは犬の肉です」と言いながら配膳をした。アップさんも「旨い犬の肉だ」と言いながらそれを食べていた。私は小さい声で「私は犬の肉は食えないんですが・・・」と聞くと、アップさんは小さい声で、「だいじょうぶ、これは豚の肉だから安心して食べなさい」と答えた。私はよく理解できないまでも、黙って豚肉の料理をいただいた。あとでアップさんが教えてくれたのは、「あれはレッダだよ」ということだ。アップさんは、隣村の男にとって嫁を与える者にあたるので、彼がアップさんに豚肉を与えるのは強い禁忌であるのだ。「さきほどは」、アップさんは説明をつづけてくれた、「彼は豚肉しかなかったのだから、それを犬の肉にレッダしたのだよ」と。簡単に言うと、レッダとは「これは犬の肉だ」と宣言することで豚肉を犬の肉に（社会的文脈で）変えることである。

別の日、近くの村の若者が葬式に招待をするためにアップさんの家までやってきた。若者の口上を聞いたのち、彼は葬式に出席しないと返事をした。あとでアップさんが説明してくれた、「あの若者は、わたしに『嫁を与える者として出席せよ』とベクすべきだった」と。換言すれば、ある人を「嫁を与える者だ」とベクすることによって、その人は（社会的文脈において）「嫁を与える者」となるのである。

エンデにはその他にもたくさんの類似の民族誌的な事例がある。この発表では、エンデのレッダおよびベクを代表とする、ある特別な宣言の意味を考えていきたい。分析のための理論的な枠組はオースティン以来の言語行為論である。彼は、発語することが発語するという行為以外にも、さまざまな行為を遂行していることを指摘した。裁判長による判決の告知「被告は有罪である」を例としよう。その発語は、被告を有罪とするという行為を遂行している。オースティンは、このような「発語する中に行なっている行為」を「発語内行為」と呼ぶ。ベクあるいはレッダはそのような発語内行為を伴う言語行為である。オースティンによれば、「発語内的力」は言語外の規約に従うことにより、その力を得るのだという。それに対してストローソンは、グライスの議論を引きながら、発語内的力の大きな部分は規約ではなく、意図によるものであると主張する。発語内的力は規約に由来するのだろうか、それとも意図に由来するのだろうか。

私は、この様に、議論の出発点を哲学にもとめる。しかし、問題を解くのは、エンデの民族誌の中である。ギアツの言うように人類学は経験に遠い概念（「発語内行為」）と経験に近い（すくなくともエンデの人の経験に近い）概念（レッダあるいはベク）とを行ったり来たりする運動なのだ。

結論は、わたしの30年前の著書『異文化の語り方』の繰り返しとなる—意図でさえも、じつは一種の規約なのだ、と。

【自由研究発表第4セッション 12月9日 13:40-14:15 B会場 2B206・207教室】

20世紀後半ジャワにおける占いの知識の変容

プリンボンの出版に注目して

前田 彩希

(神戸大学・修士課程)

本発表では、ジャワの占い本プリンボンに注目して20世紀の占いの知識の変化や出版背景を明らかにし、秘儀的な知識や系列の異なる知識がいかに媒介されたのかを考察する。プリンボンとは暦や数字を用いたジャワ固有の占いを中心に、儀礼の手順、呪文、薬等の日常生活で実用的な知識を寄せ集めた本であり、19世紀後半から無数に出版されてきた。プリンボンを見ると、ジャワにおける占いの知識のあり方は、ナショナリズムや華人の出版ネットワークとの関わりによって20世紀の間に大きく変化したことがわかる。

「プリンボン」には実践上と出版上の二重の意味がある。ジャワの人々の実践のレベルでは、プリンボンは本自体のみならず、ジャワの占い、その中でも特に暦や計算を用いた実践や知識のことを指す。一方で、出版上の意味はより広く、知識を保存するための一種の容れ物のようなものとして機能している。そこでは内容の良し悪しの評価はあっても「これはプリンボンではない」と否定されることはない。この二重の意味によって、プリンボンには、暦を用いた占いを掲載するという大まかなコンセンサスはあるながらも、必ずしもそうでなくてもよい、という緩やかに解釈できる余地が生まれている。そのためプリンボンは知識人層と大衆、系列の異なる知識を媒介する媒体として適当であった。

プリンボンを媒体として、20世紀に占いの知識は階層や地域を超えて縦横に媒介された。ジャワ文学出版の先駆者タン・クン・スイは、宮廷詩人を自宅に集めて執筆を支援し、限られた人しか得られなかった知識を一般大衆が手に取りやすい形で出版し、占いの知識を縦方向に媒介した。さらに、ジャーナリスト兼占星術家として活躍したウォン・カム・フーは、国外追放や不況の中でも中国との繋がりや出版ネットワークをうまく利用してプリンボンを出版する。彼によってジャワの占い、中国起源の占術、西洋占星術がインドネシア語で並列され、占いの知識は横方向に媒介された。

異なる階層や地域といった縦横の媒介をする上で、インドネシア語の登場が重要な役割を果たしているが、ジャワ語とインドネシア語という二つの言語は質的に異なる。それによって知識（ンゲルム/イルム）のあり方にも質的な違いが生じる。二つの言語で想起される異なる知のあり方が重なることで、ジャワの占いの知識を、それまでの神秘的・秘儀的な印象を保ちつつ、外来の占いの知識に匹敵するものとして並列することができる。

ジャワにおける占いの知識は、プリンボンという媒体として出版される中で実用性や理解しやすさのために構造化され、また外来の知識を意識して相対化された。その過程でジャワの占いの知識は西洋占星術や中国起源の占術と同等なものとして並列され普及していく。20世紀ジャワにおける占いの知識は、プリンボンや「知識」という言葉の二重性、また周縁的な立場を活かした知識人の活躍によって縦横に媒介された。緩やかに解釈できる言葉や物を媒体にして、外来もしくは新しい知識と、それ以前の知識を並列する。これが秘儀的な知識や系列の異なる知識の媒介を可能にしている。

【自由研究発表第4セッション 12月9日 14:20-14:55 B会場 2B206・207教室】

アフマド・ダフランと初期ムハマディヤ

『人間の絆』の背景を探る

小林 寧子

インドネシアのイスラーム改革派団体ムハマディヤの設立者アフマド・ダフラン（1868~1923）には著作と言えるものはほとんどないが、晩年に小冊子『人間の絆』を執筆している。これは、この時代のウラマーが書く宗教書とはだいぶ趣を異にする。「人間をつなぐのは知識である。民族は異なっても人間は皆アダムとイブの子孫、同じ血肉である。すべての人間はこの世で幸せに暮らさなければならない。人間は知識をそのままにせず、実践しなければならない。皆が心を一つにするにはまず指導者が語り合うべきだ。」というのがその趣旨である。これをブミプトラ（インドネシア人）の団体がいくつも登場したプルグラカン（運動）時代の状況から読み解く。

王侯領ジョクジャカルタ（中部ジャワ）の宗教役人だったダフランは、民族運動の先駆であるブディ・ウトモの刺激と支援を受けて1912年11月にムハマディヤの設立宣言をした。組織綱領には宗教生活のインフラを構築することが謳われ、改革派の色彩は薄かった。布教、既存の学校への宗教科目の導入、宗教科目のみならず普通科目も教える学校（マドラサ）を開設した。また、ダフランはムスリムが基本的な宗教知識を習得できるように、素人にも理解しやすい教授法を工夫した。宗教知識に強いサントリは近代知識に強いプリアイから学ぶことを説き、ムスリム同士の溝を埋めようとした。『人間の絆』では、知識を求め続けること、他人の知識を拒んではならないことを説いた。また、漫然と慣習に従うだけで理性（アカル）を働かせないことを戒め、知識が理性を強くすることを強調した。

初期ムハマディヤは目立たない団体であったが、ダフランは当時圧倒的な存在であるイスラーム同盟にも中央部の宗教顧問として関わった。イスラーム同盟に渦巻く反キリスト教感情に危惧を抱いたのか、クルアーンは他宗派への憎しみを起こさせないと説いた。ダフラン自身は他宗教の会合に参加してキリスト教の牧師や神父と意見を交換した。1918年に起きた「預言者中傷事件」は、『人間の絆』を執筆する動機のひとつになったと考えられる。当初ダフランは中傷の責任者を罰するべきだと主張したが、その後の成り行きには懐疑的になったふしがある。『人間の絆』では具体的な名前は書いていないが、指導者の私欲に駆られた行動や他人を無視して知識を拒む姿勢を危惧し、指導者同士の対立が運動を崩壊させかねないとした。ダフランがプルグラカンの様態を批判的に見ていたことがわかるが、そう述べることでムハマディヤの諸運動体の中での位置づけを明確にすることにもなった。